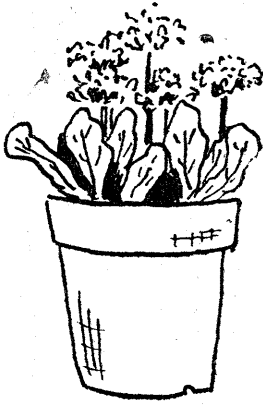


イギリスの幼児教育

(中)

小川正通

N.T.



二、今日の保育学校の生活

(一)

保育学校は、家庭の代用でなく、家庭の延長という考え方を基礎としている。したがって建築様式・遊園・遊戯室の配置や設置などはもちろん、教師と幼児との人間関係も、できるだけそれにふさわしいように注意が払われている。教師は、あるときは賢母のように、あるときは慈母のように幼児を世話するし、また、保育学校の全職員（給食・事務職員を含めて）に率先して、幼児中心に仕事を進めなければならない。保育学校がめざすのは、幼児の発達条件を充足させることであるが、それは家事に忙殺されている母親にとっては、困難であろう。家庭では、命令や禁止が多くて、子どもの活動的実験を充さないが、保育学校では、すべてが子どもの要求に適合するよう計画されているから、自由かつ安全に子

どもが活動できる環境が整備されているといえる。子どもを保育学校へ出してあげば家庭の母親は、「静かにしなさい」、「さわりなさんな」、「またそんな質問」などと言をいうことも少なくなり、多忙な時間を子どもに妨げられないですむ。したがって母子関係も良好に保たれる。また保育学校への出席によつて、子どもの社会性が発達するし、地域社会の経験も豊かになるし、五才で幼児学校へ入学するときにも、自信があり、協力的であることができる。

(二)

母親が働いている地区の保育学校の始業は午前七時、終業は午後七時であるが、一般の保育学校では、始業も午前九時前であつて、しかも必ずしも厳格でない。保育学校の毎日のプログラムは、天気の良い日には、室外で、長時間の自由遊びから開始する。さらに全日、室外で遊び、食事や午睡も室外で行われることがある。そ

して教師の役割は、子どもをできるだけ自由に活動させ、質問に答え、求めに応じて指導と助言をなすことにあるのである。必要な場合には、子どもを保護し、仲裁し、また協力や他人の権利の尊重すべきことも教える。また有用な教具や教材をやたらにこわさぬよう指導するが、他方、これだけでも差支ないものも提供して、子どもの破壊的衝動を満足させもする。さらに子どもの要求にふさわしく、かつその発達を促すに足る種々の遊具・教具・教材などを用いさせる。たとえば、筋肉の発達を促進するもの——わく登り・厚板・ロープ・箱車・ボール・シーソーなど。創造的活動に役立つもの——木片・砂・水・庭園用道具。想像的遊びのための道具——人形とままごとの家・人形に着せる服と小道具・積木・家政用機具（洗ったり・掃除したり・料理したり）など。

十時十五分頃。入室。暖かい日には、手

を洗い、室外のテーブルで、ミルクとおやつ。便所へは行きたいものだけ行く。（午睡のときだけは一せいに行く）職員の一人は、便所に出ばつていて、世話や監督をする。この「しつけ」を重視して、校長と教員が仕事を分担し、若い助手に一任したりしない。それがひるがえって、また助手の教育にもなっている。

おやつがすむと、年長児は、音楽やお話の時間。年少児は、それへの参加を多くに希望するとき以外は、遊びに再び出る。多くの保育学校では、「第二の遊び時間」に種々の作業を行う。それは「第一の遊び時間」と違って、肉体的活動の少ない、描画・粘土細工・構成遊具による遊びなどを行う。希望の幼児は、「第一の遊び時間」のもの継続が許される。

(二)

十一時三十分頃。何人かの子どもが先に手を洗いに行き、昼食用のテーブルをなら

べる。他の子どもは、つぎに手を洗い、食事の用意ができるまで、絵本を見たり、お話を聞いたりして、待っている。昼食はおいしく、品よくしつらえられ、それに肝油と果汁がつく。しかし肝油と果汁は、他の時間に与える学校もある。食事の方法も学校によって同一でないが、一般的傾向としては、自分の食事を自分で処理させ、必要に応じて教師や助手が少し手伝うだけである。食事が終わったら、すんだ子どもから順に手を洗い、歯をみがく。（歯ブラシの使用の当否については、意見が分れていてある学校では、食後になまのニンジンやリソゴの小片を与える）この方法によると、子どもが食事を急がないし、また食事のおそい子が終るのをまつ必要もない。またせると、さわがしくなったり、けんかになりやすい。

ある保育学校では、すべての子どもが昼食後、ベッドをならべ横になる。しかし睡

眠を好まず、ベッドに横になっても無駄な子どもたちのために、静かな作業で代用させる学校もある。いずれにしても、教師から休養・休息を要求される。年長児は、休息時間を短かくしている。そして一般に休息後は、室外で遊び、母親が迎えにくるまでそれを続ける。とくに発音がおくれている子どもには、ミルクと特別の食事を提供する。

(四)

いわゆる学校的な学習は、殆んど全くやらない。遊びがすべての教育の基礎であり遊び即子どもの学習という考え方からである。話すことや言語は、重視しているが、そのための特別な時間は、設けていない。しかし遊びの間や食事や手洗いの場合などに、教師と子どもが種々話合うことを通して、自然にそれは習得されるであろう。作業も、いわゆる学校的なものでなく、自由な作業である。そして教師は、その作業を

見守り、必要に応じて手助けし、子どもが知的にも満足するよう導く。また子どもが教師のお手伝をしたり、他の子どもの手助けをすることは奨励されている。教師は幼児に固定的な習慣を養うよりも、むしろ親愛の情を養うことをめざしている。一日のうち、一定時間、年長児と年少児を互いに遊ばさせる。それによつて、年少児は多くのことを学び、年長児は年少児を手助けする機会をもつからである。しかしつぎのことは、忘れてはならない。すなわち年少児にとっては、静かにしている時間と大人との親密な接触の機会が必要であり、年長児には、一層活潑な遊びと年少児に妨げられてはこまる知的な実験の機会が必要である。ということである。とにかく四才児と二才児とは、心身の発達上、大きな相違があるのであるから、それにふさわしい指導が行われなければならない。

三、現代の幼児学校の生活

(一)

先に述べたように、旧学校的な学習・訓練様式を維持している伝統的な幼児学校もおお残存している。しかし新しい様式のものも、急速に増加して、伝統的なものに対して、次第に影響を及ぼしているのが現状である。新旧両幼児学校のプログラムは、今日なお同一とはいえないが、共通点も亦多い。

近代的な幼児学校の日課も、自由活動の時間で開始される。子どもは種々の計画やアイデアをもつて登校するのであるから、それをすぐ活動にあらわす必要があるし、また静かな仕事につく前には、自由な活動や話合が必要であることが、研究の結果、立証されているからである。ただこの自由活動の時間が、全校一せいにもたれるので一箇所に密集して、互にさまざま合わない

よう注意が肝要である。

子どもの活動形態は、保育学校のそれと同一ではない。幼児学校の子どもの方が、社交的だし、グループも大きく、また仕事も継続的であるからである。したがって製作したものを残しておき、他日それで遊ぶ場所も用意しておく必要がある。一室内に病院・小屋・お店・飛行場・駅などを作り同一のグループが数週間にもわたって、それを遊びに利用することさえ、決して珍らしくない。室外にも小屋を作ると、それを活用して、種々の活動を行う。また絵を描いたり、小道具で模型を造ることも好む。博覧会や遠足のあとには、全クラスが同一のテーマで仕事をやることもあるが、彼等の年令では、一般にグループ・プロジェクトの方が、クラス・プロジェクトよりも多い。六―七才児においては、片付の前に、作業の評価や翌日の計画のために、教師と話し合う時間が必要である。いずれにしても

自由活動の時間は、子どもの言語訓練、思想促進、問題解決などにとつて、大切である。

登校後、ただちに短かい時間、歌・讚美歌・お祈りのために集合させる学校もあるが、多くの幼児学校では自由活動の時間を先にして、それを朝の最後に充てている。

十時十五分頃、片付開始。十時三十五分おやつ。つぎに遊びに出る。十一時頃に五才児は「静かな活動」の時間。すなわち読んだり、書いたり、描いたり、製作したり絵本を見たり、教遊びなど。その間に年長児は読・書・算。ついで「バイブル」(十一時四十分頃)の時間をすませ、昼食に家へ帰る子と、学校で昼食をとる子。

(二)

午後五才児は、静かな仕事かお話し・音楽を聞く休息の時間。休息のために横になつてもよい。つぎに教師が、詩やお話を聞かせ、それから劇遊び・音楽をやるか、自然

観察のため出かける。それらがすむと自由に遊ぶか、すきな製作。年長児の休息は、午後に短時間だけ。そのとき教師は、静かに本を読んだり、音楽を奏でる。ついで再び、読・書・算の時間。それがすむと詩・お話し・自然研究の時間。体操はすべての子どもが、必ず一日一回は運動場か体操室かで行う。しかし朝の自由活動の時間には行わない。

時間表は、固定的でなく、教師の自由裁量がきく。その表示も、たとえば、自由活動・指導活動・鑑賞のような概括的なものである。そして、読・書・算も「活動の時間」のトビックから引出したり、遠足もトビックと結びつけて実施する。読・書・算の系統的学習は、六才までやらないのが普通である。それが研究の結果、正しいときについて、次策に興味をもつよう誘導するにすぎない。お店遊びのときに、「お店が開

「いている」というような揭示を出したりはする。注意すれば、遊びを通して算数の初步的経験を与える機会も充分見出されるであろう。かようにして、六、七才児において、読・算の欲求が生じたときに、その直接指導やドリルを行う。しかも子どもの生活に直結させて。

(三)

形式的模倣的な製作は、行わずに、自由に製作し、また討議や評価を行う。示範も必要なきに限ってなされるにすぎない。

また今日では、会話のレッスンもとくにやらない。子どもお互いの話合やデスカッションや教師と自由に話合うことが、子どもの言語能力を自然にたかめるからである。ただ子どもの要求に応じて、教師が新しい言葉と表現の指導を行う。かくして新しい幼児学校は、非常に朗らかにになり、子どもも社交的になった。読方は、子どもたちが作った大きな本から進めて行く。文字指導は

簡単な書付か絵の下に何か書くことから入って行く。それがやがて子どもの絵日記や本になる。また読むこと・書くこと・話すことの関連を重視している。さらに読方は文章と語から入って、つぎに発音と綴りを文字指導も、文章と語を書くことからはじめる。自然に関する活動も、旧幼児学校と違って、庭いじり・動植物の飼育栽培・見学などを盛に行い、天候などの観察記録も作る。生物に対する興味は、保育学校以来続いている。

(四)

かように新しい幼児学校は、社会の要求と子どもの発達の要求に応じて、保育学校の基礎の上に、教育活動を継続する。しかしなお幼児学校の建物は、前時代の遺物の観を呈しているものが少なくない。そして遊園や便所や手洗も、必ずしも幼児向きにできていない。便所が屢々建物の外にありまた便所の指導監督のための婦人の助手も

いない。保育学校を経由しない子どものためには、助手が必要であるのに。さらに給食用の設備も、充分でない。調理室が離れていて、食事を運搬しなければならぬ場合も多い。教師たちは気持のよい食事環境をつくるよう努力してはいるけれども。

また一組の幼児数が過多である。現在の教職員に一人プラスさえしても、子どもの肉体的保護と学習的指導に役立つであろう。とくに進度のおくれている子どもを救うことができる。現行規定では、文字指導の時間で、一学級四十人となっているが教員不足のため、実際はそれ以上の人数となっている。三、四才児の保育学校では、一組三十人、担任教員の他に助手、二才児のときは十五人、教員一、助手一、さらに応援の助手も用意されている。幼児学校の一組の子ども数をどうしても減らさねばならない。保育学校・幼児学校ともに、両親の会があるが、幼児学校では、子どもの数

が多いので、親密な会をもちにくい。教師はもちろん、努力して、和気あいあいなふん囲をつくるよう努力を払い、ある程度は成功しているが。

(四)

進歩的な教員は、かような悪条件のうちにも、新しい指導法を研究実践している。それによって設備も改善され、他の幼児学校とも好影響を及ぼしている。教員を中心に教頭・校長さらに国の視学官も協力して自由な実績を行っている。官庁は常にサジェッションの形でアドバイスしている。

地方教育長も、幼児学校の設備の改善・充実に深い関心をもち、ために美しい新建築も次第に進捗している。地方指導主事や教員養成大学の教官も、教育方法の研究に協力してくれる。大学の実習生も、それに協力し、実習生はまた研究上の利益を学校からうけている。

要するに幼児学校は、理論上も実際上も

多様であるが、全体としては、今日イギリスの教育上における尊敬に値する地位を占めるに至った。その発達上において保育学校とくらべると、多くの不利益な点もある

が、保育学校の長所をも採用し、幼児学校は前進している。そして七才—十一才児の下級学校の教育に対して、すでによい影響を与えつつあるのである。

第23回夏期保育講習

講師及科目

講 演	前 文 部 大 臣	安藤 正純
仏教保育のあり方	本 会 長	椎 尾 三井
幼児教育の進み	都 立 大 学	内 山 憲
保 育 解 説	聖 徳 保 育 学 校	鈴 木 倫
保育の実際	都 立 保 母 学 院	山 本 長
イギリスより帰りに	医 学 博 士	山 本 長
製 作	宝 仙 短 大	高 橋 洋
仏教童話と人形劇	京 都 児 童 芸 術 研 究 所	高 橋 良
実用保育リズム	宝 仙 短 大	賀 来 琢
伴奏並音楽指導	理 事 ・ 作 曲 家	本 多 鉄

日時 自七月二十一日(木)至七月二十三日(土)
午前八時—午後四時

会場 東京都中野区宮前町 宝仙学園講堂
国電高円寺 都電本町三丁目 都バス宝仙寺前

会費 400円(当日受付・受理後返戻せず)

宿泊 希望者申込順により近隣宿舍鞆旋(おそい方は少し遠くなります) 一日350円 主食一日三食五合宛

申込 本協会あてハガキにて住所、氏名、園名記入但し受付の返信はしません

東京都港区芝公園二明徳幼稚園内

日本仏教保育協会

電話(芝)四三三七番